

『絵本との出会い』～加古里子作品を中心に～

矢野 日出子

○ はじめに

幼稚園現場での保育、そして大学での授業を実践する事は難しく、度々自己嫌悪に陥った。前者は幼児、後者は大学生である大人。両者とも共に面白くなければ、こちらを向いてくれない。それでは人間が「自発して学ぶ」にはどうすればいいのだろうか？筆者にとって解決できない途方もなく難しいテーマである。しかし、もがいているうちに時々、ほんの少しではあるが明るく楽しく希望を感じることが出来ることもあった。

若い未来ある学生に保育現場で仕事をしてほしいと切に願っている。というのも自分自身「幼稚園の先生」であることが誇らしく心底「いい仕事！」と確信できるからである。その「いい仕事」と思えるのは、純粋な幼児と一緒に生活できること、これに尽きる。そして他にも自分自身も彼らと一緒に弾めること。彼らと一緒に悩めること。彼らの驚くような鋭い感性に学んだり、正直で率直な気持ちに感動したり、落ち込んでいる時に励まされたり「自分のクラスの子どもたち」というよりも「同志」のように思っていた。

大学で出会った学生も然り、である。彼らは賢明で冷静に物事を捉え、逞しくしかもしなやかに生きている。教えられ励まされることばかりであった。

こういう生活ももう終わろうとしている。ホッとするものの一抹の寂しさはあるが、「学び」は生きている限り続くだろうしこれからも今まで教えていただいたことを宝物として、次からの学びに続け自分自身成長していきたいと願っている。

2018年5月に私が予てより敬愛して止まない加古 里子氏が94歳でこの世を去った。遠い遠い雲の上の存在のような人であるが、その作品には随分親しみ、教えられることが多々あった。彼の数々の作品には温かみがあり夢がありユーモアがあり、しかも生活感に溢れた素晴らしい作品ばかりである。長年の幼児と私の愛読書でもあった。学生にも現場での保育に繋がったらいい、そしてこれらの優れた作品を伝えていこうと思い、授業の中で取り挙げ勉強してきた。幼児も大学生も大好きな作品ばかりである。

ところで彼の作品はなぜ愛されるのか。また、膨大な作品（およそ600点）があるが筆者のまだ読んでない作品も数多くある。これを機会とし、彼の作品をより深く味わいたいと思う。そこで思い出深い数々の作品を通して彼の素晴らしさを改めて再確認し、加古里子の足跡をも振り返ってみたいと思う。

1 日本を代表する児童文学者『加古 里子』について

加古はユネスコの講師として世界中で講演をしている。どこの国に行っても、その時の最初の挨拶は決まって『実は私は、少年の頃、日本の軍人になろうと思った、そのなれの果てなのです。目が悪かったので、軍人にもなれず、飛行機にも乗れなかったので、皆さんの国に迷惑をかけずに済んだけれど、そのまま進んでいたら、どんなことをしていたか知れないので、お詫びに参りました。』と自己紹介するという。また「どこの国でもこれを言うと、喜んでくれます。…中略…昭和二十年というのは、僕にとって、一人の人間の終わりであり、始まりの年なのです。」～引用(1)～と述べると記している。軍人（飛行機乗りになりたかった）を目指したのに目が悪く戦争に行けなかった、戦争に行った多くの同級生は死んでいった。一途に信じてきたことが敗戦という結果になり苦い経験を味わったり懺悔の気持ちを強く抱きすべての事が信じられなくなり「大人はもう信用できない、飽き飽きだ。…中略…これから生きていく子どもたちが、僕のような愚かなことをしないようにしたい。子どもたちは、ちゃんと自分の目で見て、自分の頭で考え、自分の力で判断し行動する賢さを持つようになってほしい。その手伝いをするなら、死にはぐれた意味もあるかも知れない。…中略…子どもたちは僕にとっての生きる希望となりました。」～引用(2)～筆者は彼がこのような気持ちをもっていたことを知って驚いた。尤もあんなにユーモラスで可愛くて微笑ましくて幼児の感性を捉え、彼らが楽しめる紙芝居や絵本を何故、工学博士である加古が作れるのかを不思議に感じていたが、このように「自国の敗戦」に裏付けられた深い考えや思想があるのだな、と驚いた。彼の根底には、昭和20年の「敗戦をきっかけとした人生の始まり」があったのである。そこで改めて「加古 里子」がどんな人間であったのか、どんな気持ちで優れた作品の数々を作り出したのか、一人の児童文学者を学んでみたい。

・1926年（大正15年・福井県武生市〈現在の越前市〉生まれ）

大正15年～昭和8年（1932）までを武生で過ごす。この時期の美しい自然あふれる武生で兄や姉と野山で遊んだ経験が後の絵本作りに影響を与えている。

北陸の小さな町、武生。唱歌『ふるさと』の歌詞そのままの日本の里山らしい景色が広がっていた。

日野川でのメダカやドジョウ、オタマジャクシとり、野イチゴ摘みや桑の実とり。今でもどこに野イチゴがたくさんなっているか、どこに湧水が湧いていて、オタマジャクシがいるか、地図を描くことができる、と語っている。『おたまじゃくしの101ちゃん』には加古の幼年期の遊びの原点があり、他にも子どもの遊びや伝承遊びの本には野の草を紹介する遊びが多いのも頷ける。

当時の日本の状況といえば、金融恐慌、張作霖事件、満州



事変、上海事変、国連脱退など戦争に突き進んでいく暗い時代であった。そういう中でも加古が満ち足りた子ども時代を過ごせたことは貴重で得難い体験だった、と述懐している。その後、昭和8年には一家で東京・板橋区に転居する。

昭和13年、中学校に入学した加古は図書館に入り浸りの文学好きな少年であった。中学2年生の時には、学費の不要な航空士官になることを目指し、好きな絵を描くことや図書館への出入りも止め、陸軍士官学校に行き模範的な軍人になるため理科、数学と心身の鍛錬に努めた。ところが4年生の時に近視が進み受験資格が無くなった。『軍人になれないと分かった途端、これまで“頑張れ”と言っていた先生や校長先生の態度が変わってしまったのです。配属将校というのがそれぞれの学校にいたのですが、そういう人たちが、いっぺんにてのひらを返したようになって“なんだ、軍人にもなれんようなやつか”』というようになった。僕はそれにすごく反発しました。」～引用(3)～それなら自分は技術者の道に進もうと考えて、理科の方面に進むことになった。この軍人になれなかった苦い経験が根底にあり、それどころか終戦だ、民主主義だ、と言って新しい時代を謳歌しようとしている大人たちに幻滅を感じ、「これまでの自分は昭和20年で死んだのだ。これから以後は余生である。～中略～先に逝った仲間たちの分も生きて、自らの誤りを償わなければならない。」～引用(4)～と決意し、得意の絵を生かしたアルバイトや「演劇研究会」の裏方の仕事や脚本描きなどの活動が、後の仕事に繋がっていった。こうして東京大学工学部応用化学科に学びながら演劇研究会に所属。卒業後、民間企業の研究所に勤務しながら^{*1}セツルメント活動に従事する。そこで子どもたちと一緒に遊びながら紙芝居や幻燈などの作品を作る。また、加古は1949年頃より『教育紙芝居研究会』の編集と発行を1957年～終刊の1959年まで引き受けていた。この間、200作ほどの紙芝居や幻燈を作っているが現在は殆どが残っておらず残念である。

・1946年、旧制高校を卒業し東京大学工学部に入学。

東京大学では「東大演劇研究会」に属し演劇の面白さに開眼する。この演劇研究会では文学部の学生が表方として活躍していたが工学部である加古には出番がなく、仕方なく大道具や小道具などの舞台装置を作っていた。そのうち脚本の面白さに引かれ、ひそかに「童話劇」を志すようになる。『夜の小人』(1947年)を自作・演出し近隣の小学生を無料招待したり他にも『幸福の王子』など4本の演劇脚本を書いたりしている。翌1948年には卒業し化学会社に就職、1973年、47歳の時に退社するまで演劇活動との二足の草鞋を履く。

それにしても会社員とセツルメントの活動を同時に努めるなど驚異に値する。そのような事ができたのもセツルメントにやってくる子どもたちの応援があったからではないだろうか。

・1959年『だむのおじさんたち』で絵本作家としてデビュー。

その後の作品数は約600点にのぼる。

加古自身以下のように作品歴に区切りを付けている

〈第1期〉…1950年代〈子供会を中心として紙芝居をしていた時期〉。

「わっしょいわっしょいブンブン」(1951年)他。子供会での特定少数の子どもを対象にその反応を見ながら紙芝居作りをする。当時は紙芝居が主流だったのか数多くの紙芝居作品を作っており、この時作られた作品のいくつかは後年、絵本になっている。

〈第2期〉…1960年代〈福音館書店を中心に絵本を制作・発表していた時期〉

出版された絵本がよく読まれ、不特定多数の全国の子どもが相手となりその反応が怖かった、と述べている。出版社の売り上げをみて「よかったのかな」などと思いつつ読者の反応を窺いつつ絵本作りをしていた時期である。『かわ』(1962年)『おたまじゃくしの101ちゃん』(1964年)『ゆきのひ』(1966年)『だるまちゃんとてんぐちゃん』(1967年)などの作品がこの頃に出版された絵本である。これらの作品は今なお半世紀以上にわたって読み継がれている。加古の作品の中でも私が愛読していたのはこの時期の作品が多い。また1960年代というのは「絵本の黄金期」と言われるほどに今でも読み継がれている絵本が多く出版されている。まさに現代絵本の礎が築かれたエネルギー10年間だったと言える。加古里子もこの時代に、今でも子どもたちに愛される多くの絵本を発表している。

〈第3期〉…勤務先を退社し児童文化関係の仕事に専心するようになった時期。

科学者である加古は、彼にしかできない「科学絵本を作成する」という依頼を受けながら、科学とは何か、知識の本とは何か反問しながら制作していた。

〈第4期〉…演劇とか人形劇とか立体的なものをまとめておきたいと思いつつ現在に至る。

2 作品歴について

今も愛され読み継がれている加古の作品を辿ってみたいと思う。ここで特筆すべきは、絵本を発表するまでの「紙芝居」の作成と「セツルメント」の活動である。

前述したように1948年(S23)大学を卒業し加古は化学会社に入社し、化学会社に勤務しながら、従来から興味をもち活動を続けていた演劇→人形劇→紙芝居を作るという二足の草鞋を履くことになる。加古はこのセツルメントでの活動を通し、『大切なことは、すべて子どもたちに教わった』と回想している。紙芝居に始まり、絵描き遊び、石けり「ケンパ」、幻燈等々彼は子どもたちと遊びながら絵本作りへとつながっている。尤も作品を作るために遊ぶのではない。『加古 里子 絵本への道 一遊びの世界から科学の絵本へ』には「私はセツルメントの活動によって『子ども』と『遊び』と『紙芝居』に接するようになり、そして松居さんと福音館に出会って『絵本』にたどりつくに至ったので、私の持つ絵本創作の技術や技法などといっても、やみくもの経験と試行錯誤の重なりにすぎません。それをからくも持ちこたえさせてくれたのは『おまえはなぜ生きているのか』『なんでそんなことをするのか』という自分の生き方の追求と反省のひそかな七転八倒の結果でした。」と述懐している。～引用(5)～

もちろんこの彼の述懐は謙遜の気持ちが込められてはいるものの、戦後の混乱期であること、セツルメントでの子どもとの遊びを原点とし創作活動を続けていったという事は大変な苦

労のあったことであろう。当時は1945年に太平洋戦争が終結を迎え社会は混乱していたが、1947年、21歳の加古は東大演劇研究会で『夜の小人』や『幸福の王子』など4本の演劇脚本を書いている。翌1948年（S23年）には企業に就職しながら演劇活動を続けていた。またこの年には極東軍事裁判が終わり、吉田内閣が発足して戦後のひどい混乱の中によろやく明るさの見てきた時代であった。

いわゆる“団塊の世代”と言われるベビーブームの到来もこの時期である。1950～1951年にかけて加古が品川区や川崎市でセツルメントの活動に情熱的に取り組んだのも当時は、まだまだ貧しい子どもたちが大勢いたからだろう。この頃より彼は演劇脚本に始まり1971年頃まで数々の優れた紙芝居を創作している。これらの作品の中には後の優れた絵本につながる作品も多い。

その後1960年（S35年）に福音館書店から絵本『だむのおじさん』を刊行するまでの十数年は紙芝居、幻燈、果ては素話まで子どもと共に生活し創作を楽しんでいる様子が窺える。その中には、幾つかの紙芝居作品が後に絵本として刊行されていることも興味深い。

・紙芝居『わっしょいわっしょいブンブンブン』（1951年／川崎セツルメント）

絵本『わっしょいわっしょいブンブンブン』（1973年／偕成社）

絵本のあとがきに作者自身『このおはなしは、おおげさにいうと、わたしにとって記念碑的な作品のひとつです～引用(6)～と語っている。子供会活動での紙芝居を作成してからなんと26年間に経ち同じテーマの絵本になって再登場したわけである。この時発表された絵本は子どもたちが批評し示唆した点を取り入れて作り上げた、とのことである。

この作中には人物が1094名、動物が465匹、物や道具が294個描かれている、と作者が述べている。加古の作品には人物や物等々画面いっぱい描かれて幼児が興味をもって見入る、探す、見付けるなどの魅力があるがこの作品はまさしくその意味からも『記念碑的な作品』であるだろう。この一つ一つ緻密に紙面いっぱい描かれる手法はその後の作品にも見受けられる。しかも登場するどんな小さなものでも作者の温かい心が感じられるし、丹念に丁寧に描かれているところが幼児に伝わるのではないだろうか。『わたしはこの作品をよろこんで見つけた子どもたちを思い出しながら、そしてまた、新しくこの本を見てくださる方々の顔を考えて描き続けたことをつけくわて、あとがきといたします。』～引用(7)～と述べている。実際、作者自身が子どもと一緒に遊んでいる、子どもの世界で生きている、更に言えば、この絵本の冒頭の『みんなしあわせで、たいへんよいおくにごりがありました。』このことは、彼自身の願いだっただのではないだろうか。

1951年と言えば戦争が終わり日本中が復興に向け所謂ベビーブームがひと段落着いた時代である。主なこの年の出来事と言えば

・NHK紅白歌合戦が始まる ・力道山が活躍する ・結核予防法が公布される

- ・児童憲章が制定宣言される ・木炭タクシーが廃止され、小型タクシーが急増
- ・パチンコ大流行 ・プラスチック製のままごと用の「茶器セット」が大流行
- ・プラスチックという言葉が広がる

まさしく新しい時代の到来を感じさせる頃であったかもしれない。同時に子どもが大勢いて「教育」の大切さに目が向けられようとしていたのだろう。

絵本『わっしょいわっしょいブンブンブン』の冒頭の「たいへんよいおくに」という設定は加古自身が敗戦後の日本を「たいへんよいおくに」にしていこう、という願いと共に意気込みがあったのかも知れない。また「児童憲章の制定」や「プラスチック製のままごと」などは子どもがどこの家庭にも大勢いて社会における子どもの存在感が増し、重要視されつつあったのかもしれない。彼の作品にも庶民の生活道具が数多く登場し生活感を感じさせる。そして自身が述べている「子どもの頃からのお祭り好き」「音楽好き」「演劇好き」そして「絵を描くのが好き」という加古の共通する温かく人間を包んでくれる愛情深さが感じられる。



【2007年6月25日 第1刷発行】
絵：宮下 森 童心社



【1973年2月1刷 2007年4月54刷】
絵と文：加古 里子

1951年版の紙芝居版は残念ながら見つからず上記の紙芝居は2007年発行の作品である。右の絵本と比較すれば絵本は加古が絵も文章も描いているが、紙芝居では絵は宮下 森によるため少し趣が違ふ。が画面を見ていて楽しい気持ちになることや登場人物の素朴で愛らしい表情は損なわれていない。絵本の方は1973年に発行されてから2007年4月までになんと54刷も発行されている。子どもたちに人気のあることが分かる。

- ・絵本『だむのおじさんたち』（1959年／福音館書店）

1959年（S34年）に加古は絵本作家としてデビューする。この作品は、工学博士でもある自身の知識を生かし子どもの「科学性」を養う事にも繋げていく意気込みが感じられる。加古の

作品は演劇→紙芝居・幻燈→絵本につながっている。このことは当時、幼児の読む絵本は少なく紙芝居が主流で、セツルメントの活動では紙芝居が子どもたちに受け入れられたのだろう。また子どもたちの保護者には日本鋼管や日立造船所に勤務する人たちが多かったため、加古は船とか鉄鋼などの重工業を扱ったもの、また当時は度々停電があり電気の状況が悪い状況下にあったので「発電」をテーマとする作品の制作を考えた。日本は山も多いし水も豊かである。そこで子どもたちにダム建設から山に発電所建設、と水力発電について知ってもらおうと考え『だむのおじさんたち』が作られた。

この他にも紙芝居から生まれた絵本としては、『あおいめくろいめちゃいろのめ』（1972年／偕成社）『からすのパンやさん』（1973年／偕成社）『あかいありとくろいあり』（1973年／偕成社）『どろぼうがっこう』（1973年／偕成社）など今でも子どもたちに愛されている作品ばかりである。

この絵本『だむのおじさんたち』は、紙芝居を次々と作っていた加古が初めて著した謂わば『デビュー作』であり、制作のきっかけは当時福音館書店の編集者だった※2『松居 直』より「今の日本の状態に一番ふさわしいものを書いて下さい。」と依頼されたことだった。丁度この頃、日本は戦後の復興期でもあり造船ブームに沸いていて、前述のとおり臨海地帯である川崎市のセツルメントにやってくる子どもたちの父親は工場で働く労働者であった。高度経済成長期であった日本であるが労働者は過酷な生活を強いられていた。また夕方になると度々停電が起り日常生活に支障を来していた。火力発電は煤煙が多い。それなら自然豊かな日本の国土には水力発電がいいのではないかと、子どもたちに水力発電に興味をもちダムを建設して山に発電所が出来るまでを描こうと考えた。このような背景があり『だむのおじさんたち』が生まれた。



『だむのおじさんたち』（2007年11月30日初版発行・2018年6月9日2刷発行復刊ドットコム）

やまおくのたにがわを、おじさんたちがのぼってきました。

「なんだ、なんだ？」「なにしてるんだ？」やまのけものやとりたちがしんぱいしました。

「みず のんでるんじゃないね。」「おさかな とってるんでもないわ。」

「じゃ、ぼくたちをつかまえにきたのかな？」

「いいや、そうでもないらしいよ。」このひとたちは、みずをせきとめて、やまに、はつでんしょをつくるしたしらべにきたおじさんたちでした。

おじさんたちのしらべによって、ここに、おおきなだむをつくることになりました。

〈中 略〉

とらっくがきました。ぶんどーざーがきました。ひやけたおじさんがきました。

はちまきのおにいさんもやってきました。がっしりしたおじさんも、せいたかのっぼのおにいさんもいます。じゃりも、ざいもくも、てつも、せめんとも、どっさりたくさんとどきました。いよいよこうじがはじまりました。

〈中 略〉

こうじは、よるもひるも、こうたいでつづきます。なにわぶしのすきなおじさんがやすみばんになると、こんどは、ひげのおじさんのはたらくばんです。「おつかれさん。」

「あと、たのんます。」「ごくろうさん。」やまのけものがねているよふけ、ふくろうが、じつとみているよなか、おじさんたちはねむらない。おきています。うごいています。

はたらいています。

〈中 略〉

こうじはなんねんも、なつもふゆもつづきます。「おーい、えらくふってきたぞ。」

おじさんのことばはらんぼうです。」「すべっておちたらいのちがないぞ。」

らんぼうでこわいです。」「くにおっかさん、なかせないよう、きをつける。」「

らんぼうでこわくてーやさしいです。ゆきにもかぜにも、ふぶきにもあらしにも、

はたらくおじさんたちはまけません。なきべそなんかかきません。

とうとうだむができました。おじさんはじつとだむをみています。だむをきずいた、おおきなて。ふというで。がっしりしたかた、ひにやけたかおー おじさんはわらっています。みんなでやまへのぼりましょう。ほらー

やまびこがよんでいます。ばんざーい、だむのおじさんたち！

やまびこがかえってきます。ばんざーい、だむのおにいさんたち！

『だむのおじさんたち』より

工学博士である加古は子どもたちに、ダムを建設して山に発電所が出来るまでの苦勞を知ってほしいと考えたのであろう。尤もその願いは十分に達成していると考えるが、それ以上にセツルメントに遊びに来る子どもたちへの愛が溢れ出ている。彼らの父母に対し応援したり、子どもたちに働く父母の姿を伝えたりしている。特に下線部に加古のやさしい思いやりに溢れた

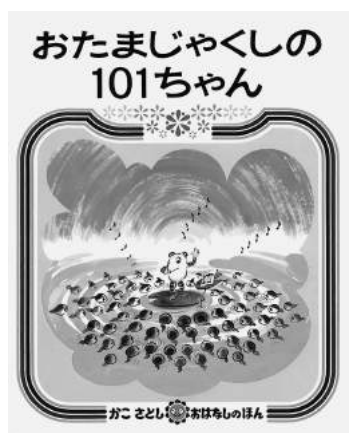
気持ちが汲み取れる。

以後『ゆきのひ』（1966年／福音館書店）『たいふう』（1967年／福音館書店）『でんとうがつくまで』（1970年／福音館書店）など生活感があふれ、しかも抒情的な作品が生まれている。これらの絵本も子どもたちと一緒に遊びながら彼らの家庭環境をもよく理解したうえで作られたものであろう。

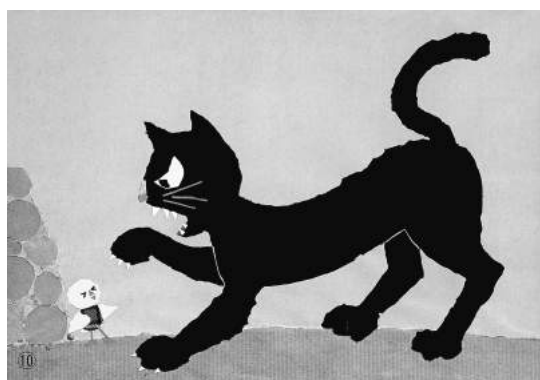
・紙芝居『ひよこのろくちゃん』（1975年3月／童心社2006年4月25刷発行）

絵本『おたまじゃくしの101ちゃん』（1973年／偕成社）

筆者は『おたまじゃくしの101ちゃん』が特に気に入り毎年梅雨期には何回も何回も子どもたちにせがまれて読んでいた。



筆者は紙芝居『ひよこのろくちゃん』が絵本『おたまじゃくしの101ちゃん』ベースの話になっている、と思っていたが実際には逆だった。にわとりとカエルの違いはあるものの6羽と101匹、ろくちゃんと101ちゃんが勝手なことをして怖い目に合うことなど酷似している。



一番小さくいたずらっこのろくちゃんが、みんなから離れていると…出会った相手は「のらねごろべえ」であった。



勝手なことをしてみんなの散歩の群れから外れ迷子になってしまった101ちゃんがかまってしまった相手は、ザリガニの大親分であった。

- ・紙芝居『カミナリゴロちゃん』（1953年／川崎セツルメント）
絵本『だるまちゃんとかみなりちゃん』（1968年／福音館書店）



他にも加古は同一テーマ、よく似たテーマで絵本や紙芝居を作っている。話の流れや登場人物は酷似しているがなぜ彼は紙芝居や絵本を作り続けたのだろうか？

左の『だるまちゃん と てんぐちゃん』は加古の代表作の一つで発行されてから半世紀以上が経つが今なお読み続けられている。『わっしょいわっしょいぶんぶんぶん』にみられるような紙面にいっぱい物や人物を描く手法はここでもみられる。

また上記の2冊だけでなく『だるまちゃん』シリーズは8シリーズ出版されている。

かみなりちゃんその他、うさぎちゃん、とらのこちゃん、ひめだるまちゃんなど子どもたちが大好きな絵本である。筆者も見るだけで可愛いだるまちゃんやかみなりちゃんが大好きである。少々わがままでお父さんのだるまどんに無理難題を押し付ける様子が実際の子どもとだぶって微笑ましく感じられる。細密に描かれた挿絵にも思わず見入ってしまう。

ちいさいだるまちゃんは うちへかえって いいました。
「てんぐちゃんのような うちわがほしいよう」
おおきなだるまどんが たくさんうちわを だしてくれました。」
「こんな うちわじゃ ないんだけどな」
だるまちゃんが かんがえているうち いいことに きがつけました。

なぜ日本の民芸玩具である「だるま」をモデルに絵本を作ったか…。

加古は『未来のだるまちゃんへ』（2014年6月25日／文藝春秋）の中でこう語っている。「だるまちゃんには、僕がそれまで出会ってきた子どもたちの面影が宿っているのです。…〈中略〉いかにも品行方正な子どもなんて、ひとりもいなかった。小憎らしいはずら坊主ばかりです。でも、この小憎らしいところが、僕にとっては『生きてる！』って感じがまざまざとするところなのです」この時、なるほど、彼は子どもの心を持ち続けて生きていたのだ、と納得できより親しみを感じた。子どもたちと一緒にこの絵本を読んでいるときには、いっぱい団扇や扇子が出てくるのだなあ、としか思わなかったが（P28～30）には、だるまどんのモデルは自身の父であることが書かれており驚いた。子煩悩な父親で「実直で真面目で働き者だった父は、しがない勤め人の典型でした」～引用(8)～と表現しているが子どものためには何でも聞き入れる父であったようだ。加古自身も大変に愛情を受けて育っている、その経験がこれらの絵本の根底にある温かさや微笑みしさ、穏やかさにつながっていると言える。長年にわたり子どもたちに読み継がれているこの絵本の魅力は、ただ、だるまちゃんの可愛さだけではなかったのだと感じた。加古は自身の父親を「不肖の父」と敬愛の念を込めて表現してる。

3 優れた科学絵本の実際

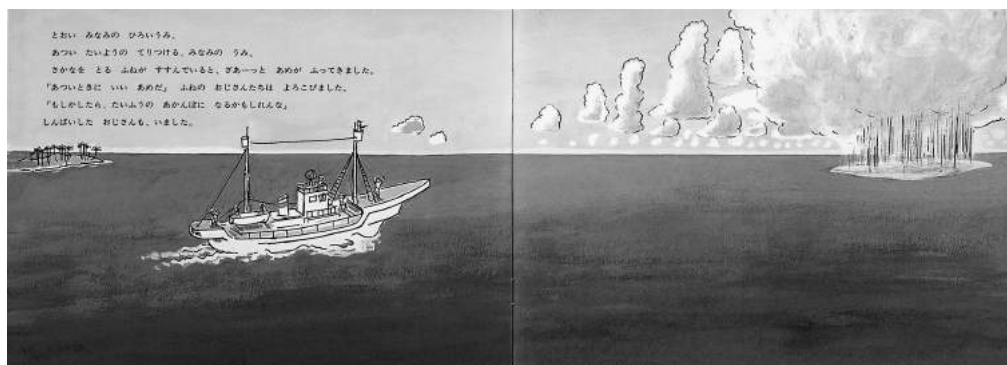
加古は工学博士でありながら、演劇→紙芝居→絵本と創作活動を進めていった。その経歴を生かしそして出版社の要請もあり優れた科学絵本も作成している。加古は科学の本を「科学の本というからには、その題材が科学的な事柄であるだけでなく、その把握の仕方が科学的であることがより大事であると考えたのです。…中略…これからも人々の考えや賢さと共に更に大きく深く未来をひらいてゆく態度の中に科学があるということを示したいと思いました。」また「個々の部分部分はそれこそすばらしく詳しく述べられているにもかかわらず、それがどんなふうに全体にかかわっているのか、どうこの世の中と関係があるのか、いったい、自分とどうむすびつけたらいいのかわからないまま、『教養』や『知識』とやらだけで終わるのでは、少しもったいないと、私は考えました。」～引用(9)～と述べている。加古は信念をもって子どもたちへ科学の面白さや不思議さを伝えようとしたのであろう。だから彼の著した科学絵本は子どもたちに愛される。何より分かりやすく、画面も美しい。何より真実が描かれている。加古が絵本デビューした『だむのおじさんたち』（1959年／福音館書店）にも、科学者である彼の情熱があふれている。ダム建設にかかわる苦勞が分かりやすく親しみやすく描かれている。そしてこの絵本を通し、『ダム建設に携わる人々の苦勞や喜び、周辺の自然や動物、そういう周辺の物との関わりや調和の姿までまとめたものにしたい。』と述べている通りである。1959年と言えば戦後の復興期の初めの頃ではないだろうか？伊勢湾台風の襲来で5041名が亡くなり、NHK教育TVの放映が始まった。加古の初めて描いたこの絵本が発行された当時もきっと「ダム建設」が日本のあちこちで行われていたのではないだろうか？この絵本が好評で次々と科学絵本が出版されることになる。加古は『かこさとし 一人と地球の不思議とともに一』

(2017年／河出書房新社)の『かこさとしインタビュー・科学の本の作り方』の中で『科学絵本作りは論文から…20年後も通用するように』との熱い思いや見通しをもって作ったと語っている。改めて読み返してみると優れた作品が多い。

・ゆきのひ (1966年／福音館書店)

『だむのおじさんたち』の続編のような絵本である。雪国の子どもたちの生活を描き郷愁を感じさせる。雪合戦やスキーで逞しく遊ぶ子どもたち。かまくら作りも大好きだ。しかし雪国では大雪が降り生活に支障を来す。吹雪が吹き荒れ停電が起こる。ロータリー車が雪を飛ばし線路を守る。なかなか鎮まらない雪嵐である。子どもたちは祖母や母親と一緒に留守番をしている。この絵本にも停電、雪嵐、吹雪などの自然現象が描かれている。また懸命に命を張って働く大人も描かれている。神戸の子どもたちはこれほどの大雪や吹雪を体験していないが雪国で暮らす苦勞や楽しみは思いはせることが出来た。他にも『たいふう』(1967年／福音館書店)『海』(1969年／福音館書店)

『地球』(1975年／福音館書店)『宇宙～そのひろがりをしろう～』(1978年／福音館書店)など今も読み継がれている絵本がある。例えば『たいふう』を例にとると



とおい みなみの ひろいうみ。あつい たいようの てりつける、みなみのうみ。
 〈中略〉「こちら、たいふうかんそくき。あかちゃんたいふうが あらわれました。
 にっぽんに むけて、すすむもようです

この書き出しの文章を読むだけで子どもたちは『台風』に興味をもち、知りたいと思うのではないだろうか？この作品にも台風で増水した河川や流されそうになった堤防、そして命がけで台風に立ち向かう大人が描かれている。結末は台風が去った安堵感をもって終わっている。挿絵をみても彼の作品は、自身の科学の知識をもとに綿密に考えられた構成と膨大な資料に基づいて細部にわたるまで丁寧に描かれている。だから子どもが楽しめる。

4 子どもの知的な興味の発達を促す絵本

・あなたのいえわたしのいえ（1969年／福音館書店）

子どもに分かりやすく家のつくりを紹介している。P1～2の「いろんないえがありますね。あなたのすんでいるいえはこのなかにありますか？」

この書き出しで始まる文頭の絵本を子どもは凝視して探すだろう。家がなければ我々の生活は成り立たない、みんなそれぞれの安住の場を持っている、等々あたたかな雰囲気には溢れている。単に家の作り方や間取りを教えるだけでなく「自分の暮らし」「家族に囲まれたあたたかな家庭」のぬくもりを幼児が感じることが出来る絵本である。

・はははのはなし（1972年／福音館書店）



ははは はっはっはっはっはっ あはは あっはっはっはっはっ
 みんな おもしろそうに わらっています。 ～中略～
 おや？ だれか ひとりだけ ないていますね。みんなが わらっているのに
 どうして ないて いるんでしょう？

毎年6月4日「虫歯予防デー」が近づくと読んでいた絵本である。

歯の大切さを子どもたちが学べるように、歯の果たす役割や歯がないとどうなるか、人間の歯の仕組みなどが分かりやすく描かれている。どこにも「歯を磨きなさい」「虫歯になるとどうなるか」などとは描かれていない。しかしこの絵本を読んだ子どもたちは納得して歯磨きを

したりおやつを食べすぎたりしないよう自発的に「虫歯予防」に取り組んでいた。

・『でんとうがつくまで』（1970年／福音館書店刊）『ごむのじっけん』（1970年／同書店刊）『どうぐ』（1970年／同書店刊）『だんめんず』（1973年／同書店刊）

これらの作品は「科学絵本」として位置づけられ子どもたちが楽しめる絵本である。

5 その他の長年愛されている絵本

①とこちゃんはどこ（1970年／福音館書店）②とんぼのうんどうかい（1972年／偕成社刊）

③からすのぱんやさん（1973年／偕成社刊）

他にも数々の絵本があるが上記のように思い出深い絵本に絞って挙げてみた。①は「とこちゃん」といまさに幼稚園児であろう男児が両親に連れられ動物園に行き迷子になってしまう話である。どの子どももが「とこちゃん」に共感し楽しめる。②も③も挿絵が細密に描かれていて思わず画面を見入ってしまう。この画風は『だるまちゃん』シリーズや『えわっしょいわっしょいぶんぶんぶん』でも同様であるが、作者自身が楽しんで描いていることや読み手がつい引きつられて読んでしまう事、など子どもに受け入れられる点であろう。共通した特徴として

- ・ 幼児の日常生活体験が生かされている
 - ・ 文章にリズムがあって物語の展開をなめらかにする
 - ・ 文と一体化したさし絵
- などが半世紀以上経とうかという現在でも愛されている理由である。

○ おわりに

今回、加古里子の作品を再度読んでみて改めてその素晴らしさを感じた。保育現場で幼児と一緒に楽しんだ絵本、毎年毎年、その季節が来れば必ず読んだり、落ち込んだ時に読んだ絵本…。今回の研究をとおり膨大な数の作品があることにも気づき驚くと同時に彼の深い思想や子どもたちへの愛に感動した。筆者は保育者としていつも「加古里子作品」に親しんでいた。絵本は幼児の心を豊かにしてくれる。幼児だけでなく総ての人の心も豊かにしてくれる。浅い知識ではあったが幼児と一緒にハラハラドキドキしたりホッとしたりウキウキしたり加古作品はもちろんの事、絵本を読むことが大好きだ。もちろんこれからも自分自身を豊かにするため読み続けたい。

優れた絵本とは

- ・ 読んでいて気持ちが和む
- ・ 挿絵を見ただけで話の筋が分かる
- ・ 美しい色合いの挿絵
- ・ 文章が詩的な韻を踏んでおり読んでいて心地よい
- ・ 簡潔で心地よい話の展開
- ・ その本に描かれている世界に連れて行ってくれる
- ・ 結末はハッピーエンドで終わる

などが挙げられると思うが「加古 里子」作品はどれもがそれに当てはまる。そしてユーモア溢れ楽しい作品のどれにも彼の深い知識と愛情が感じられるから長い間子どもたちに愛され続けるのだろう。また「子どもたちが先生であった。」と述べているように彼らと一緒にの気持ちで作っているから科学絵本にしても難解な事象を分かりやすい表現で興味もてるよう読者を

導いてくれる。

「軍人になりそになった加古里子」が児童文学者として600点にも及ぶ作品を残したという業績の裏には大変な苦勞があったことだろう。そのことは未来の子どもたちへの愛と期待があればこそ成し遂げられた偉業であると思う。心から追悼申し上げ、筆者の幼児教育のまとめとしたい。

〈参考文献〉

- ①『加古 里子』絵本への道 一遊びの世界から科学の絵本へ―』
（1999年福音館書店／初版発行・2001年7月5日／第二刷）
- ②『未来のだるまちゃんへ』（2014年6月25日第1刷）
- ③『文藝別冊・かこさとし 人と地球の不思議とともに』（2017年7月30日初版発行）
- ④紙芝居『わっしょいわっしょいブンブンブン』（1951年／川崎セツルメント）
絵本『わっしょいわっしょいブンブンブン』（1973年／偕成社）
- ⑤絵本『だむのおじさんたち』（1959年／福音館書店）
- ⑥紙芝居『ひよこのろくちゃん』（1975年3月／童心社2006年4月25刷発行）
絵本『おたまじゃくしの101ちゃん』（1973年／偕成社）
- ⑦紙芝居『カミナリゴロちゃん』（1953年／川崎セツルメント）
絵本『だるまちゃんとかみなりちゃん』（1968年／福音館書店）
- ⑧絵本『たいふう』（1967年／福音館書店）
- ⑨はははのはなし（1972年／福音館書店）
- ⑩『絵本とは何か』（松居 居著：1973年12月発行 日本エディタースクール出版部）

〈引用文献〉

- (1)～(4)・(8)『未来のだるまちゃんへ』（かこさとし・2014年文藝春秋）
- (5)・(9)『加古 里子 絵本への道 一遊びの世界から科学の絵本へ―』
（1999年福音館書店／初版発行・2001年7月5日／第二刷）
- (6)～(7)絵本『わっしょいわっしょいブンブンブン』（1973年／偕成社）あとがき

※1 セツルメント活動

貧しい住民の住む地区に宿泊所・診療所・託児所などを設け、住民の生活向上のために助力する社会事業。また、その施設。隣保事業。

- ※2 1926年京都市生まれ。福音館書店相談役。同志社大学法学部卒業後、福音館書店創立に参画。編集部長、社長、会長を歴任し、多くの子どもの本の名作を出版。著書に『絵本とは何か』他多数。児童書編集者として石井とともに戦後日本の児童書の黎明期を支えた。